

ハムレットの死生観について

名本, 幹雄
九州大学医療技術短期大学部一般教育教授

<https://doi.org/10.15017/140>

出版情報：九州大学医療技術短期大学部紀要. 11, pp.35-40, 1984-03-01. 九州大学医療技術短期大学部
バージョン：
権利関係：

ハムレットの死生観について

名 本 幹 雄 *

Hamlet's Outlook on Life and Death

Mikio Namoto

1. はじめに

文学の全分野において、ハムレットの悲劇ほど人々の注意を引きつける作品はない。この作品が発表されて以来、数多くの研究が行なわれ読む人の数だけハムレット像が創造されたとも言われる。この小論はハムレットの死生観に焦点をあて、多くの苦悩と絶望とを経験した後にハムレットがどのような死生観を確立したかを明らかにしたい。

2. ハムレットの苦悩と絶望

O, what a noble mind is here o'erthrown!
The courtier's, soldier's, scholar's, eye, tongue,
sword;
Th' expectancy and rose of the fair state,
The glass of fashion and the mould of form,
Th' observ'd of all observers—quite, quite
down!

(III. i. 150-154)

(ああ、あれほど気高い御氣象だったのに、それがこうもたわいなく！王子様にふさわしい秀でた眉、学者もおよばぬ深い御教養、武人も恐れをなす鮮かな剣のさばき、この国の運命をにない、一国の精華とあがめられ、流行の鑑、礼儀の手本、あらゆる人の讚美的だったハムレット様が…………。)

と言われるデンマークにとっては、期待の王

子であり、模範的な若者であるハムレットは、父王の死、母の早急な再婚によって一挙に苦悩と絶望の淵に投げこまれる。

O, that this too too solid flesh would melt,
Thaw, and resolve itself into a dew!
Or that the Everlasting had not fix'd
His canon 'gainst self-slaughter! O God! God!
How weary, stale, flat, and unprofitable,
Seem to me all the uses of this world!
Fie on't! Ah, fie! 'tis an unweeded garden,
That grows to seed; things rank and gross in
nature
Possess it merely. That it should come to this!
But two months dead! Nay, not so much, not
two.
So excellent a king that was to this
Hyperion to a satyr; so loving to my mother,
That he might not beteem the winds of heaven
Visit her face too roughly. Heaven and earth!
Must I remember? Why, she would hang on
him
As if increase of appetite had grown
By what it fed on; and yet, within a month—
Let me not think on't. Frailty, thy name is
woman!—
A little month, or ere those shoes were old
With which she followed my poor father's
body,
Like Niobe, all tears—why she, even she—
O God! a beast that wants discourse of reason
Would have mourn'd longer—married with
my uncle,
My father's brother; but no more like my
father
Than I to Hercules. Within a month,
Ere yet the salt of most unrighteous tears

* 九州大学医療技術短期大学部一般教育教授

ハムレットの死生観について

Had left the flushing in her galled eyes,
She married. O, most wicked speed, to post
With such dexterity to incestuous sheets!
It is not, nor it cannot come to good.
But break, my heart, for I must hold my
tongue.

(I. ii. 129-159)

(ああ、このけがらわしい体、どろどろに溶けて露になってしまえばいいのに。せめて、自殺を大罪とする神の掟さえなければ。ああ、どうしたらいいのだ、この世の営みいっさいが、つくづく厭になった。わずらわしい、味気ない、すべてかいなしだ！ええい、どうともなれ。庭は荒れ放題、はびこる雑草が実を結び、あたり一面、むかつくような悪臭。このようなことになろうとは。たった二月、いや、まだ、二月にもならぬ。立派な国王だった。その父にくらべれば、あいつは雪と墨とのちがひ。父はどんなに母上を想うておられたことか。外の風にもあてまいと、それほどまでに母上を — なんとということだ、そのようなことまで憶いださねばならぬのか？ そう、そのころは、父上の胸もとから溢れ出る情愛の泉を、一滴あまきず飲みほそうと、そのうなじにすがりついて離れようともしなかった母上。しかも、年とともに深まる想いに身をひたしておられた母上。それが、たった一月。言ってみてもはじまらぬ……たわいのない、それが女というものか！ 一月もたたぬうちに。ニオベもかくやと思われるほど、あのように泣きぬれて、棺に寄りそい、墓場までおあとを追うて行った。あのとときの靴のかかともまだそのまま、跳ねのあともなまなましいというのに。母上、それを、母上は — ああ、事理をわきまえぬ畜生さえ、主人が死ねば、もすこし歎き悲しむであろうに — あの叔父の胸に身をゆだねるとは。おなじ兄弟とはいふものの、似ても似つかぬあのような男と。それも、たった一月。空涙で泣きはらした赤い目もとも、まだそのまま。おお、なんたる早業、これがどうして許せるものか……いそいと不義の床に駆けつける、そのあさましき！ よくないぞ、このままではすまいぞ、いや、待った、こればかりは口が裂けても、黙っておらねばならぬ。)

この独白で苦悩と絶望のあまり、ハムレットは死に対する憧憬と自殺への欲求を述べる。つまりこの冒頭の独白からハムレットは死を思うと同時に、運命の激変によって生きることの意味を見出せず暗い社会観、人生観を述べる。このような心理状態にあるハムレットに父王の亡霊があらわれ、父王の死は現国王クローディアスによる暗殺であることを告げ、その復讐を命ずる。この亡霊による復讐の命令はハムレットの苦悩をますます深め、次の有名な言葉となる。

The time is out of joint. O cursed spite,
That ever I was born to set it right!

(I. v. 189-190)

(この世の関節がはずれてしまったのだ。なんの因果か、それを直す役目を押しつけられるとは！)

世直しが自分の重大な務めだというこの自覚はハムレットの苦悩を一層深刻にし、有名な第三の独白でその頂点に達する。

To be, or not to be—that is the question;
Whether 'tis nobler in the mind to suffer
The slings and arrows of outrageous fortune,
Or to take arms against a sea of troubles,
And by opposing end them? To die, to sleep—
No more; and by a sleep to say we end
The heart-ache and the thousand natural
shocks
That flesh is heir to. 'Tis a consumation
Devoutly to be wish'd. To die, to sleep;
To sleep, perchance to dream. Ay, there's the
rub;
For in that sleep of death what dreams may
come,
When we have shuffled off this mortal coil,
Must give us pause. There's the respect
That makes calamity of so long life;
For who would bear the whips and scorns of
time,
Th' oppressor's wrong, the proud man's con-
tumely,
The pangs of despis'd love, the law's delay,
The insolence of office, and the spurns

名 本 幹 雄

That patient merit of th' unworthy takes,
 When he himself might his quietus make
 With a bare bodkin? Who would these fardels
 bear,
 To grunt and sweat under a weary life,
 But that the dread of something after death—
 The undiscover'd country, from whose bourn
 No traveller returns—puzzles the will,
 And makes us rather bear those ills we have
 Than fly to others that we know not of?
 Thus conscience does make cowards of us all;
 And thus the native hue of resolution
 Is sicklied o'er with the pale cast of thought,
 And enterprises of great pitch and moment,
 With this regard, their currents turn awry
 And lose the name of action—Soft you now!
 The fair Ophelia.—Nymph, in thy orisons
 Be all my sins rememb' red.

(III. i. 56-89)

(生か、死か、それが疑問だ、どちらが男らしい生きかたか、じっと身を伏せ、不法な運命の矢弾を堪え忍ぶのと、それとも剣をとって、押しよせる苦難に立ち向い、とどめを刺すまであとに引かぬのと、一体どちらが。いっそ死んでしまったほうが。死は眠りにすぎぬ — それだけのことではないか。眠りに落ちれば、その瞬間、一切が消えてなくなる。胸を痛める憂いも、肉体につきまとう数々の苦しみも。願ってもないさいわいというもの。死んで、眠って、ただそれだけなら！眠って、いや眠むれば、夢も見よう。それがいやだ。この生の形骸から脱して、永遠の眠りについて、ああ、それからどんな夢に悩まされるか、誰もそれを思うと — いつまでも執着が残る、こんなみじめな人生にも。さもなければ、誰が世のとげとげしい非難の鞭に堪え、権力者の横暴や驕れるもののさげすみを、黙って忍んでいるものか。不実な恋の悩み、誠意のない裁判のまどろこしき、小役人の横柄な人あしらい、総じて相手の寛容をいいことに、のさばりかえる小人輩のごうまん無礼、おお、誰が、好き好んで奴らの言いなりになっているものか。その気になれば、短剣の一突きで、いつでもこの世におさらば出来るではないか。それでも、この辛い人生の坂道を、不平たらたら、汗水たらしてのぼって行くのも、なん

のことはない。ただ死後に一抹の不安が残ればこそ。旅だちしものの、一人としてもどってきたためのしない未知の世界、心の鈍るのも当然、見たこともない他国で知らぬ苦勞をするよりは、慣れたこの世の煩いに、こづかれていたほうがまだましという気にもなろう。こうして反省というやつが、いつも人を臆病にしてしまう。決意の生き生きした血の色が、憂うつな青白い顔料で硬く塗りつぶされてしまうのだ。けんこんいってきの大事業も、その流れに乗りそこない、行動のきっかけを失うのが落ちか — しつ、気をつけるよ…………。))

この世が如何に不条理に満ちあふれ、苦悩の里であろうとも、死後の世界はあまりにも未知の不安と恐怖の世界である。つい人はその世界には入る決心が鈍る。この不安と恐怖はハムレットのみならず万人に共通するものと言えよう。ある意味ではこの劇は死神の召喚に直面した人間の姿を描いているというピーター・ミルワード教授の指摘は正しい。しかし復讐は当然死を予想しなければならぬ。死生観の確立が急務となっているハムレットの苦悩は万人の胸を打つ。この不安と苦悩に呻吟するハムレットもやがて次のような一種の諦観とも言うべき落ち着いた心境を示す言葉を口にするようになる。

There's a divinity that shapes our ends,
 Rough-hew them how we will.

(V. iii. 10-11)

(結局、最後の仕上げは神がする、つくづくそう思う、荒削りはいくら人間がしてもだ—)

Not a whit, we defy augury: there is a special providence in the fall of a sparrow.
 If it be now, 'tis not to come; if it be not to come, it will be now; if it be not now, yet it will come—the readiness is all. Since no man owes of aught he leaves, what is't to leave betimes? Let be.

(V. iii. 206-210)

ハムレットの死生観について

(それには及ばぬ。前兆などというものを気にかけることはない。一羽の雀が落ちるのも神の摂理。来るべきものは、いま来なくとも、いずれは来る — いま来れば、あとには来ない — あとに来なければ、いま来るだけのこと — 肝腎なのは覚悟だ。いつ死んだらいいのか、そんなことは考えてみたところで、誰にもわかりはしまい。所詮、あなたまかせさ。)

これらの言葉はハムレットの死生観が徐々に確立してきたことを意味するものと考えられる。死に対する不安と恐怖を克服して復讐の覚悟ができたと言える。ではこの死生観はどのようなものであろうか。

「最後の仕上げは神がする」「一羽の雀が落ちるのも神の摂理」「肝腎なのは覚悟だ」と言うハムレットの言葉は、聖書の中のマタイによる福音書の10章と26章のキリストの言葉を想起させる。

29 Do not two sparrows sell for a penny?
And not one of them falls to the ground apart
from the will of your Father.

29 二羽(わ)のすずめは一アサリオンで売られているのではないか。しかもあなたがたの父の許しがなければ、その一羽も地に落ちることはない。

30 As for you, the hairs of your head are all
numbered.

30 またあなたがたの頭の毛までも、みな数えられている。

31 Have no fear, then; you are of more consequence
than many sparrows.

31 それだから、恐れることはない。あなたがたは多くのすずめよりも、まさった者である。

39 And, moving forward a little, He fell on
His face, praying, "My Father, if it be possible,
let this cup pass from Me; however, not as I

will but as You will."

39 そして少し進んで行き、うつぶしになり、祈って言われた、「わが父よ、もしできることでしたらどうか、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの思いのままではなく、みこころのままになさって下さい。」

42 For a second time He went away and
prayed, "My Father, if it cannot pass from Me
without My drinking it, Your will be done."

42 また二度目に行って、祈って言われた、「わが父よ、この杯を飲むほかに道がないのでしたら、どうか、みこころが行われますように。」

ゴルゴタの丘での死を前にした、キリストの悲痛な心境がのべられているが、神を信頼し全てを神のみこころにまかせようとする覚悟がみとめられる。復讐を前にしたハムレットの心境を思わせる。ちなみにフィナテリ神父によると、摂理は人格的で愛のわざであると『キリスト教の常識』の中で四世紀の神学者、聖アウグチヌスの言葉を引用しながら次のように説明している。

「われわれの救いはわれわれの手にあるより、神の手にあるほうがもっと確実である。」

「神がわたしたちにしてくださるのは、すべて最善のこと — これが聖書の立場であり、キリスト教の信仰である。」

「だから、キリスト信者は安心して未来を神の手にゆだねる。キリスト信者は未来を知る必要はない。占いの必要もないのである。」

さらにキリストはマタイによる福音書6章で宗教の本質とされる絶対憑依の感情を説く。

26 Look at the birds of the air, how they
neither sow nor reap nor gather into barns,
but your heavenly Father feeds them. Are
not you more valuable than they?

26 空の鳥を見るがよい。まくことも、刈ることもせず、倉に取り入れることもしない。それ

名 本 幹 雄

だのに、あなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる。あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか。

27 “Furthermore, who of you is able through worrying to add one moment to his life’s course?”

27 あなたがたのうち、だれが思いわずらったからとて、自分の寿命をわずかでも延ばすことができようか。

28 And why worry about clothes? Observe carefully how the field lilies grow. They neither toil nor spin,

28 また、なぜ、着物のことで思いわずらうのか。野の花がどうして育っているか、考えて見るがよい。働きもせず、紡ぎもしない。

29 but I tell you that even Solomon in all his splendour was never dressed like one of these.

29 しかし、あなたがたに言うが、栄華をきわめた時のソロモンでさえ、この花の一つほどにも着飾ってはいなかった。

30 But if God so clothes the grass of the field that exists today and is thrown into the furnace tomorrow, will He not more surely clothe you of little faith?

30 きょうは生えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくして下さらないはずがあろうか。ああ、信仰の薄い者たちよ。

31 “Do not, then, be anxious, saying, ‘What shall we eat?’ or ‘What shall we drink?’ or ‘What are we to wear?’

31 だから、何を食べようか、何を飲もうか、あるいは何を着ようかと言って思いわずらうな。

32 For on all these things pagans centre their interest while your heavenly Father

knows that you need them all.

32 これらのものはみな、異邦人が切に求めているものである。あなたがたの天の父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要なことをご存じである。

33 But you, seek first His kingdom and His righteousness and all these things will be added to you.

33 まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう。

34 Do not worry therefore, in view of tomorrow, for tomorrow will have its own anxieties. Each day’s peculiar troubles are sufficient for it.

34 だから、あすのことを思いわずらうな。あすのことは、あす自身が思いわずらうであろう。一日の苦勞は、その日一日だけで十分である。

神を絶対的に信頼し、神の摂理に自己の運命を委ねるキリストの死生観はまさにハムレットの死生観である。ハムレットはキリスト教的死生観によって死に対する不安と恐怖を克服し、復讐にたちあがる決心ができたと言える。この一切を絶対なる者神のみこころにまかせきろうとする死生観は他力信仰である。筆者はここで『軟異抄』の親鸞の言葉を思いださざるを得ない。

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまひらすべしと、よきひとのおほせをかふりて信ずるほかに、別の子細なきなり。念仏は、まことに浄土にむまるゝたねにてやはんべらん。また、地獄におつべき業にてやはんべらん、総じてもて存知せざるなり。たとひ法然上人にすかされまひらせて、念仏して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからずきふろふ。」さらに明治の近代日本が生んだ宗教的偉才、清沢満之の『我が信念』『絶対他力の大道』の中にみられる宗教的信念にキリストの死生観に共通するものを多く見出すのである。

ハムレットの死生観について

「自己とは他なし、絶対無限の妙用に乗托して任運に法爾に、此の現前の境遇に落在せるもの、即ち是なり。」

「只だ夫れ絶対無限に乗托す。故に死生の事、亦憂ふるに足らず。死生尚ほ且つ憂ふるに足らず、如何に況んや之より而下なる事項に於いてをや。追放可なり。獄牢甘んずべし。誹謗擯斥許多の凌辱豈に意に介すべきものあらんや。我等は寧ろ、只管絶対無限の我等に賦与せるものを楽しまんかな。」

キリスト、親鸞、清沢満之に共通する宗教的信念—死生観が、シェイクスピアのハムレットの中にもみられるということは、比較思想の視点からも興味深い事実である。西洋の二大思潮の一つであるヘブライズムより生れたキリスト教と、日本民族の中に多くの共鳴者を持つ親鸞を開祖とする浄土真宗が、その根底とする人間解釈に共通の認識があると考えざるを得ない。
(1983年10月31日)

付記

ハムレットの日本語訳は福田恒存氏訳による。新約聖書は国際ギデオン協会発行のものを利用した。

参考文献

- (1) S. フィナテリ：『キリスト教の常識』 東京、講談社、1982。
- (2) 大河内了悟、佐々木蓮磨共編：『清沢満之先生のことば』 京都、永田文昌堂、1963。
- (3) 大山俊一：『シェイクスピア人間観研究』 東京、篠崎書林、1977。
- (4) 金子大栄：『軟異抄』 東京、徳間書店、1976。
- (5) シェイクスピア、福田恒存訳：『ハムレット』 東京、新潮社、1981。
- (6) 武並義和：『シェイクスピア二大悲劇論』 京都、山口書店、1982。
- (7) 田中菊雄：『私の人生探究』 東京、三笠書房、1962。
- (8) 増谷文雄：『仏教とキリスト教の比較研究』 東京、筑摩書房、1980。
- (9) マルチン・ルッター、田中理夫訳：『キリスト者の自由』 大阪、聖燈社、1979。
- (10) 脇本平也：『評伝 清沢満之』 京都、法蔵館、1982。
- (11) ピーター・ミルワード：『シェイクスピアと宗教』 東京、荒竹出版、1981。